

感情労働という言葉が最近よく見聞きする。雑誌の特集で取り上げられることもある。以前、医師という職業は、頭脳労働か肉体労働かという議論を仲間でしたことがあったが、この二者択一ではなかなか結論が出なかった。でも私は今、膝を叩いて、医師はこの感情労働者であることに同意する。

ひと昔前、「グリーンマイル」というトムハンクス主演の米国映画があった。この中で、冤罪の死刑囚である大男が、刑務所長の妻の不治の病を、神秘的な力で治療するシー



なければならぬ。そのため医師は自分の感情を管理しながら、患者の感情を深く理解し共感するよう努める。これらの感情コントロールや共感作業が、医師の感情労働であり、無機質な本来の治療行為そのものより強く医師の疲労を招く。しかし、これなしには治療は決して完結しないのである。この感情労働は、まさしく映画に描かれた患者のうちにある邪悪な虫たちを吸い込む作業であると私には思えてならない。医師は、患者を幾ばくか安堵に導くと、自身は非常に疲労する。実際、臨床家は、毎日何十人も患者から幾千の虫たちを吸い込まなければならないのであり、その疲労感は半端なものではない。では我々はいかにすればこの重い疲労感から解放されるのであろうか。治療の後は映画のように口から虫たちを吐き出す術を持たなければならない。気分転換にスポーツをしたり、趣味を楽しんだり、あるいは酒でも飲んでアル

ンがある。なんと患者から無数の虫のようなものが溢れ出て、それを全てこの死刑囚が吸い込むことで治療が成功する。患者は嘘のように元気になるが、その代わり、大男は疲れ果てぐったりと倒れ込んでしまう。そしてその後、無数の虫のようなものを全て吐き出すと、男も元気を取り戻す。このシーンは、我々医師の仕事の象徴的にうまく表現していると私は思う。

患者に対峙する時は、病気を治療すると同時に、患者の不安感や疲労した感情を救済し

医界サロン

感情労働

広報委員 黒岡 正之

コールとともに疲労を頭から蒸発させるか。優れた医師は、こうしたストレス解消も実によくこなす。これが長くこの仕事を続けるコツでもあると思う。

私はというと、不器用でいつもストレスをうまく解消できず、翌朝も重く疲労が残っていた。しかし、ようやく見つけた。最近、患者さんから沖縄土産でシーサーの置物をいただいた。私は、たちまちその特徴的な風貌の虜になり、早速診察机の真正面に置かせてもらった。シーサーのいわれを調べてみると、右側の雄は全ての魔物をその大きな口で吸い込み、あらゆる災難から守ってくれるというではないか。それから、私は一日の診療が終わると必ずこの雄のシーサーに向かって大きく息を吹きかける。多くの虫をこのシーサーが吸い込んでくれるのだ。なんだか最近朝の目覚めが良い。